
トライアル

ケータ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアル

【Nコード】

N3033BA

【作者名】

ケータ

【あらすじ】

平凡な日常を送る青年タケト。とある不思議な女性と出会い、さまざまな世界を旅することになる。行く先々には、数々の試練が待っていた。

始まり（前書き）

初めて小説を書きます。小学五年生のときから考えていた物語です。

始まり

「うわああああああ！」

暗い屋敷、雷鳴鳴り響く中、青年の叫び声がこだまする。

青年の腕の中には爪で引き裂かれ、血まみれの少女が抱かれていた。一年前まではこんなことになるなんて夢にも思わなかった。

僕の名前は滝沢タケト、年は十六、身長は百七十ジャスト。体型は少し筋肉質、これは幼いころから体操をやっていたおかげだ。

今現在、W高校、偏差値五十三、特に何か飛びぬけた人が通う学校でもなく、進学校としても中堅の、平均的な学生の通う学校の生徒だ。

髪型は黒髪のショートレイヤー、サラサラというわけでもない、直毛である。本人はスタイリングに変化がつけられないと、少しクセのある髪を羨ましがっている。目は一重だが、細い印象はない。そんなタケトが、部活の帰り道、とある不思議な女性と出会う。

この出会いは、彼の一生を決めてしまう出会いだった。

「その君。ちょっといい？」

そう言いながら、タケトの目の前に、どこからともなく現れた。

その女性は、茶髪でストレートで、腰まで届いていて、目はブルーである。二十代後半くらいで、きりりとした目で、身長はタケトより少し高い百七十五くらいで、服装は、スーツであった。

「君、魔法使ってみたくない？」

「え、ま、まほう？」たけとは少し驚きながら復唱した。

「魔法って、空を飛んだり、火の玉を出したりするやつですか？」

「そう、私は地球とは別の世界の、魔法が発達した世界からやってきたの。」

「あなたの世界じゃなかなか信じてもらえないと思うから、少し見せるわね。」

呪文を唱えたようだった。するとふわりと浮かんだ。

「そ、そんな、ゲームや漫画の世界だけかと思ってました。」

「そう、いろいろいな世界があるの。」タケトは半信半疑だったが、話を聞いてみることにした。

「あつ、名前まだ言っただけじゃなかったわね。レイラ、レイラ・ウォーレイン。世界を移動できる魔法で、いろいろいな世界を旅してるの。」

「僕は滝沢タケトといいます。でも、なぜ僕なんですか？僕に魔法なんて仕えるんですか？」

レイラは笑顔で、

「使えるわよ。あなたには素質がある。魔力を感じるわ。」

「僕が魔法」

タケトは勉強でも体操でも、芽が出たわけでもなかった。普通の人よりもちよつと出来る程度だった。

そんなタケトは、素質があると初めて言われて嬉しかった。何も無い僕が魔法を使えると思っただら、わくわくした。

「ちよつと説明するから、私の家に来てくれない？」タケトは言われるがままついていく。そこは、タケトの近所の広い空き地だったはずだった。

「ここって、空き地のはずじゃ！」タケトはうるたえながら聞いた。「魔法で何とかなっちゃうのよねー。それに、私の家お金持ちだし。」

「どうにかなっちゃうって」

タケトはなつかば呆れながらも、目はきらきらしていた。

レイラに案内され、屋敷の中に入った。広いエントランスを見回しながら、一室に案内された。

その部屋も広く、短距離走が出来るくらいの書庫だった。

たくさん陳列された本の中から、一冊の本をレイラは取り出した。「この本、始まりの書っていうの。私の世界のエンデルシアでは魔法学校があつて、その学校で初めて渡される本なの。」

タケトは渡された本をパラパラめくった。

「その本にはね、魔法の基本が書いてあるの。一ヶ月もあればマスターできるわ。そして、私と一緒に旅してみない？」
その問いに、タケトに葛藤や逡巡はなかった。

始まりの書をマスターする間、屋敷で練習を行った。自己防衛のために剣術も習った。

レイラ自身の戦闘スタイルは、RPGでいう武闘家と魔法使いを合わせたような、感じらしい。

一ヶ月の間練習の合間にいろいろな話を聞いた。例えば。

レイラは魔法学校のとくに攻撃魔法はいつもトップだったけど、補助、回復魔法はビリだったので、僕に苦手な魔法を覚えてもらって補ってもらって旅のお供にしたいとか。

「私には夢があって、私の世界で、約二千年前に世界の危機を救った、ネクロとフォビアみたいな、大魔道士になりたいのよねー。」
とか

エンデルシア人は、寿命が長いらしく、レイラが二百才だとかなど。そして始まりの書をマスターし、旅へ出ることとなった。

初めての旅

旅の日、剣とその世界に合った、服を渡され、装備した。剣はタケトのひざから下くらの小ぶりの剣だ

扱いやすいようにらしい。服装は中世ヨーロッパ風のRPGによく出てくるような勇者のような服だった。レイラも魔道士みたいな口ブ姿だった。

「じゃあ、行くわよ。」

「はい。」

「ネクストゲート」

本当に一瞬で、瞬間移動のように森についた。

「ここはエランという世界なの。」

とこの世界の説明を始めた。

「魔法が発達した世界で、ここはロサリアね。」

「この国は、騎士団が有名なの。剣術の修練にびったりだと思うの。」

「

あっち。」

そういつて指した方向には、大きな城が見えた。行くわよとレイラが歩き出した。

少し歩くと、何か物音が聞こえた。近づいてみると、ウルフに囲まれた男女二人組みがいた。

「くそつ、囲まれちまったぜ。面倒だな。」

と男はいった。女のほうは息が切れていた。タケトはまず、剣でウルフを後ろからざくりと、剣を振り、一匹を倒した。その間にレイラは、メギドという広範囲に炎を撒き散らす魔法で、十匹まとめて灰にした。

「ふうー、助かったぜ。サンキュー。」

とツンツン頭の男が言った。ツンツン頭の男の方は、タケトより少し背が高く、グローブを装備している。格闘で戦うみたいだ。女の

ほうは、シヨートカットで、細い剣を持っている。さっき見た限りでは、それほど剣の腕は良くなかった。二人とも軽装だった。

「オレは、レオン。こっちは。」ツンツン頭のほうはレオンというらしい。

「私はエリー。助けてくれてありがとうございます。」
そして、僕たちも自己紹介をした。

「これから私たち、ロサリアに行くの。あなたたちは？」

「あつ、俺たちもロサリアに行くんだ。」

「じゃあ、一緒に行かない？」

とタケト。タキトは同年代と判断したらしい。

「レイラさんも一緒なら心強いです。」

とエリー。この二人はあてもなくたびをしているらしい。レオンは魔法が使えなく、エリーは、回復魔法が得意らしい。

「へえー、剣術を学びに行くんだ。」

「そうなんだよ、剣の腕はまだまだ未熟なんだ。魔法もだけど。」
と恥ずかしそうにタケトは言う。

お互いに話しながら、ロサリアに向かった。特に何事もなく、二十分ほどでロサリアの城下町に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033ba/>

トライアル

2012年1月8日10時47分発行